

演奏会

▼ベビーカーの贈呈



ボランティアが自分の成長に



大石 愛さん(2年生)
水沢第一高等学校 生徒会副会長

水沢一高は、震災直後から生徒会が中心となって被災地に支援物資を運んだり、被災地での清掃活動や募金活動など、様々なボランティア活動を続けてきた。大石愛さんは、生徒会副会長・ボランティア担当として活動に携わってきた。

「震災後に、被災地のために生徒会でも何かしたいなと思って、生徒に呼びかけをして、まずは物資を集めました。3月24日に、集まった物資を陸前高田に届けたのが最初の活動でした。」物資は終業式の日を持ち寄ったが、地域の人たちも協力してくれたという。「私たちにできることは少ないんですが、それでも生徒が参加してくれるのはうれしいです。」

3月末には浸水した小学校の掃除の手伝い、夏には草刈りや養殖いかだづくりなども手伝った。「最初は、もともとあった町がほとんどなくなっていて、つらかったというか、本当に言葉にならないぐらいでした。でも、何度か通っているうちに少しずつなってきました、町の雰囲気が変わってきたりするのがわかる、それに自分たちも貢献していききたいなという思いがありました。参加している人たちはみんな復興への思いがあるので、全員で同じ気持ちで活動していきたいです。」

活動を続ける中で、生徒の意識も変わってきたという。「被災地の人の話を聞くときに相手の気持ちを理解しようとか、被災地にどう貢献すればいいかといったことを考えるようになりました。」普段はまじめではない生徒が、被災地に行くと人が変わったように一生懸命働く姿もあったという。震災直後から始まったボランティア活動は今も続いている。

「最初だけ行ってやめるなら被災地の方々にも失礼だし、たった1回行っただけで変わるわけでもないですから、継続的にやらないと。復興は何十年もかかることなので、これからも継続的にやっていきたいと思えます。」愛さんたちは支援を長く続けることがそれが大事だと感じている。

息の長い活動を続けている水沢一高に、いわてユネスコ賞の特別賞が贈られた。生徒全員の活動が評価された賞だ。「賞をもらうために活動してきたのではないのに、賞をいただけでうれしいです。」と愛さんは顔をほころばす。

「被災地の方々、つらい中でも私たちが行くとき優しく接してくれたりして、自分もつらいのにすごいなと思うし、そういう姿を見ると少しだけでも何か力になれると思います。」愛さんは、将来人の役に立つ仕事をしたいという。

